



第七話

古九谷という頂点を見つめ、 独り登る

第七・八話では、今日の九谷焼を代表して活躍する二名の作家にフォーカスします。
まず訪ねたのは、「泰山窯(たいざんがま)」四代目の武腰潤さん。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

2020.10.24~12.20まで開催された「産地のオンラインミュージアム KUTANism」の主要コンテンツの1つ。陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼の物語を再発見していく連載シリーズです。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら





第七話

古九谷という頂点を見つめ、独り登る

「上絵付け」は九谷焼の“華”であり、“作家性”が最も顕著に現れる工程でもあります。そして一口に上絵付けといっても、その様式や技法、さらには制作への信条が作家によって全く異なることも九谷焼の面白さ。

「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」の第七・八話では、今日の九谷焼を代表して活躍する二名の作家にフォーカスします。まず訪ねたのは、「泰山窯(たいざんがま)」四代目の武腰潤さん。武腰さんの九谷焼は、“芸術作品”として国内のみならず海外からも高い評価を得ています。また、お弟子さんも多く“作家九谷”を牽引して来られたお一人。

その一方で“九谷焼ではなく、自分は古九谷をやっている”と語る武腰さん。その真意や、制作への想いなどをうかがってきました。

案内してくれた人



武腰 潤さん

能美市寺井町の「泰山窯」4代目。石川県九谷焼美術館館長。名工として知られる初代武腰泰山を祖父に持つ。金沢美術工芸大学卒業。日展や日本伝統工芸展で活躍する一方、武腰さんの作品はニューヨークやロンドンなど、海外で“芸術作品”として高い評価を得ている。



「九谷焼」からの逃避と、「古九谷」との邂逅

武腰: 実は僕、家の仕事というか「九谷焼」というものをやりたくなかったんです。

秋元: えっ、そうだったんですね。武腰さんには以前からお世話になっていますが、その話は初めてうかがいました。

武腰: 大学では日本画を学んでいて、最初の2年間くらいは遊びまわっていたんですけど(笑)、3年目あたりから“絵画”というものを真剣に考えるようになっていました。

その目線から見る「九谷焼」というものが、どうも好きになれなかったんですね。当時は「九谷焼が嫌い」という人も多かったですし。

秋元: その武腰さんが、今や九谷焼を代表する作家さんのお一人になっているのがおもしろいですね。どういった心境の変化があったのでしょうか？

武腰: 金沢美術工芸大学を卒業してから、身体障害者の方の訓練校で、1年間九谷焼の絵付け講師をしていた時期があったんです。写生に始めて、下絵をつくって、上絵を描いて。

生徒さんの就職のお世話をするところまでやっていました。

当時の僕はただ美大を出ただけで、家(泰山窯)の仕事も手伝い程度でやっていました。すると、その訓練校で焼きあがった生徒さん達の作品が、僕がつくるものよりも遥かに良いんですよ。“上手・下手”という話じゃなくて、何というか絵に“強さ”がある。

仮にも九谷焼の家に生まれている自分が、全く情けないと思ったんです、“これじゃいかん”と。だから訓練校の講師は早々に辞めました。さりとして「放浪の旅に出たい」と言ったところで長男なので許してもらえそうもない。だから親に黙って家出したんですよ。

秋元: いいですねえ(笑)。



武腰:当時の東京には学生運動のアジトがいたるところにあったので、そこを泊まり歩いていました。毎日美術館に行って、ひたすら絵画ばかりを観て。ついに行く美術館がなくなってしまい、「今日はどうしようか」なんて考えながら上野公園でぼんやり座っていたときに、ふと見上げると大きな和風建築があった。

それが「東京国立博物館」だったんですが、何気無く入ると全国の工芸品展のようなものをやっている。そこに牡丹が描かれた古九谷の大皿が並んでいたんです。その器というのが、同じ場に並んでいた他のどの産地のものとは比べても全く違った。圧倒的な存在感でした。

もし僕が工芸を勉強していたらそうは感じなかったのかもしれないけれど、纯粹美術をやってきた身としてはその“力強さ”に強烈に惹かれました。

秋元:いろんな美術館を見尽くして、最後に古九谷に出会ったと。もはや啓示に近い出会いですね。

武腰:“自分の行き先が見つかった”という感じがしましてね。「ご心配をおかけしましたが、今から家に帰ります」と、その日のうちに親に手紙を書きましたよ(笑)。

秋元:いいお話だなあ。とはいえ以前からも「継がなきゃいけない」という意識は、どこかにお持ちだったんですよね？

武腰:ええ。でも父親がやっていた“産業九谷”のようなものは、やりたくないと思っていたんです。僕は寺井(石川県能美市)でしたから、それまで古九谷というものを知らなかったんですよね。けれど古九谷に出会って、あの“美術性”というか、“工芸と違う何か”に惚れてしまったんですよね。

秋元:ある種の絵画性というか。やはり“古九谷”って特別な存在ですか。“工芸”や“九谷焼”という括りでは簡単には括れないものであると。

武腰:全然違います。古九谷は“純粹美術”だと思っています。

僕は古九谷で一番最初につくられたのは「大皿」だったのではないかと考えています。

その後にいろんな食器ができあがってきて“工芸品”として使われるようにはなつたけれど、大皿そのものが“キャンバス”であり、古九谷は“絵画”であったのではないかと。

秋元:もう武腰さんは、「丸谷焼」をやっているというより、「古九谷」と向き合っている、という感覚なんですね。

武腰:そうです。



秋元:ところで、古九谷に出会ってある種の啓示のような形で衝撃を受けられたわけですが、実際に武腰さんがつくっている釉薬や作品というのは「古九谷の再現」では全くないですよね？そこが非常に面白いなど。

武腰:“再現”なんてことをすると、もう“古九谷”じゃありません。一方で世の中には古九谷を真似たものが沢山出回っていますがね。

でも古九谷って“再現してはいけないもの”なんですよ。あれはもはやアートですから。そもそも江戸時代には、白磁というもの自体大変貴重なものでしたよね。そんな貴重なものに絵を描いていたのは普通の“職人”ではなかったと思うんですよね。相当修練された、文武に長けた“武士”だったんじゃないかと。

秋元:なるほど、武腰さんは古九谷が単にいち職人がつくっていたものではないとお考えなんですね。



武腰: もちろん古九谷でも後々職人が描いたものも出てきますが、初期につくられていた大皿こそが「古九谷」だと僕は思っています。

僕は絵の実地をやっていたから“素人の筆”というのは見れば分かる。

「自分を律する心」を持っていない人の描いたものはこちらに訴えてくるものがない。

私が東京国立博物館で古九谷の大皿に出会って受けた衝撃のように、“ドーンッ!”ときてもらわなければ古九谷ではないんですよ。

秋元: お話をうかがっていると、武腰さんにとっての「九谷焼」って、かなり限定的で面白いですね。

本当に、天辺中の天辺というか。

武腰: あくまで、“私にとっての九谷”ですよ。

秋元: 九谷焼って「多様であるから面白い」という文脈で語られることが多いですが、「じゃあ“九谷の真髄”って何なんだ」と聞かれた時に、武腰さんのお話は一つの指針になりますよね。



古九谷的“色の奥行き”と、白の“フォルム”。

秋元:話は少し戻りますけれど、古九谷と出会って放浪の旅から戻ってきた武腰さんは、いわば“産業九谷”をされている家業を継がれたわけですよね？

武腰:はい。ですから昼間はずっと父親の手伝いをしていましたよ。夜になって、ようやく自分の時間ができると、乳鉢を擦っては釉薬の研究をしていました。



工房にずらりと並ぶ絵の具。

秋元:家の仕事で腕の修練をしながらも、隙間の時間にご自身の求める古九谷の姿を模索していたわけですね。当時は家業をされながら何か矛盾のようなものを感じて悩んだりされた時期などはなかったのですか？

武腰:目の前に大きな木があって、その頂上に“古九谷”がある。
そこによじ登ることだけに必死で、悩んだり余所見する余裕なんてなかったですね。

秋元:本当に古九谷に対してストイックですね。

武腰:古九谷を目指す上で、まず最初にやらなくてはいけないことが、あの深い色を出せる釉薬をつくりだすことです。

夜な夜な進めていたもので、その色に辿り着くにははすごく時間がかかりました。
ようやく「できた!」と思えるものができたのは35歳くらいで、10年はかかりましたね。



秋元:やはり古九谷の一番の魅力って、釉薬の「色」ですか。ちなみにご自身で「できた」と納得できたポイントっていうのはどのあたりだったのでしょうか？

武腰:やはり色の“深さ”ですよ。

秋元:ああ、“深さ”ですか。一方で、武腰さんの釉薬には透明感もありますよね？

武腰:透明感があるというより「透明感があるように見える」のです。私の釉薬には“奥行き”があるので、結果として透明感があるように見える。透明度だけでいうと、他の釉薬屋さんの方が透き通っていますよ。

秋元:確かに古九谷の釉薬って、油絵の具に近い粘り気ある厚みというか、不思議な奥行きがありますよね。僕は古九谷を見る度にステンドグラスを思い出しますが、ああいう“積層化した厚み”のようなものがある。ただ単に透明なだけじゃない。





武腰さんが独自に開発した、色に奥行きがある釉薬。



秋元:次に素地についてですが、武腰さんの素地はろくろ挽きの大皿ではなく、タタラ成形(※)でご自身でつくってられますよね？当初古九谷の大皿に惹かれていたわけですが、タタラを選ばれたのはまたどうしてだったのでしょうか。

(※)タタラ成形...板状の粘土を貼り合わせて形をつくっていく成形法。

武腰:絵に集中するためです。僕は陶芸科を出てないので、ろくろが挽けない。習ったとしても、あの大皿を挽くのは大変なことです。だからといって、自分が思うような素地を他の人につくってもらうときは付きっきりで横にいることになる。

だから自分でできるタタラでいこうと決めまして。

秋元:ああ、絵に集中するためだったんですね。

でもご自身でわざわざ作られるくらいだから、武腰さんにとっての素地は単に“白いキャンバス”ではないわけですよ。素地へのこだわりって、どんなところにあるんでしょうか。



武腰: フォルムですね。磁器というのは成分が溶けるので、焼成の際に窯の中で歪みます。陶器は窯の中で歪むことはほとんどないけれど、磁器は歪む。その“意図せぬ歪み”が面白いというか、そこに気持ちに乗せやすいんです。

秋元: なるほど、100%自分でコントロールするのではなくて、ある種の“揺れ幅”のようなものが作品をより魅力的にしている。そこには絵画や美術とも違う、“工芸のおもしろさ”がありますよね。

武腰: あとは白釉(※)の層ですね。僕は白釉が厚い方が好きで。でもその“厚み”を出す時はいい釉薬じゃないと剥落してしまうんですよ。
(※)白釉...陶磁器用の白い釉薬。

秋元: これだけ白釉を厚くするのって大変なんですね。実は私、余白の多い九谷焼って、どこがポイントなのかよく分からなかったんですよ。

でも“余白”というものを大切にしているということは伝わってくる。なるほど、今おっしゃったみたいにこの「どういう白い面をつくるか」は、上絵付けに匹敵するくらい重要なことだったんですね。



武腰さんの作品。余白にも美しさがある。

“令和の古九谷”を、生み出していく。

秋元：上絵付けをする上で大切にされていることはありますか？

武腰：僕は絵付けをするまえに、いつも庭を眺める時間を持つようにしています。古九谷を描いていた武士の心情というか、己を律するのです。そして絵付けに臨むことで、良い構図になる。心身のコンディションって、本当に重要なんですよ。



武腰さん自宅の庭。手入れが行き届いて清々しい。



秋元：なるほど、そういったルーティーンがあるんですね。武腰さんの作品は、輪郭線が印象的ですが、やはり“線”は大事にされていますか。

武腰：日本の美は“輪郭線”です。

秋元: いいフレーズだなあ(笑)。

武腰: 古九谷を目指す上でも「線描」は非常に重要です。

武士のもつ線描。だからといって、現代の私が武士のまねをしても仕方ないですからね。

令和を生きる私が、それも麻雀や将棋が好きだったりする私が描く線描というものは、こういうものでいいですよ。何も古九谷の真似をする必要はない。

武士の心情というか、己を律して絵に臨むことさえできていればそれでいい。



武腰: 僕の原点は職業訓練校で受けた衝撃ですから。1年間であれだけのものが描けるようになる。彼らは事故や災害で体に障害を抱えているのですが、その中で再就職を目指して本当に一生懸命なんです。線が震えていたりするけれど、彼らの絵には訴えてくるものがある。僕にはハンディがなくてサラサラ描けるのに。そのときに感じさせられた圧倒的な“差”、それはつまり“絵に向かう心” だったんですよね。

秋元:面白いですね。障害者の方の絵と古九谷、それは一見して質的に異なるように見えるけれど、ある種そこに宿っている“魂”のようなものが、武腰さんを変えていく原動力になっている。

武腰:“下手だけど上手い”という境地が一番良いですよ。

秋元:武腰さんからそんな言葉が出るのが面白いですね。工芸って、ある意味“技術”じゃないですか。

武腰:そういう意味では、僕は工芸家じゃないんです。“絵描き”であり、ただ“古九谷をやっている人”なんです。



秋元:古九谷をやっている人と言い切るのはすごいですね。ちなみに、武腰さんは日展等でもご活躍ですが、武腰さんにとって公募展って、どんな存在ですか。

武腰:僕も公募展育ちで、そこで見出してもらったという部分ももちろんあります。

“見てもらう機会”というものはとても大切ですから。けれど段々年をとってくると、果たして公募展に出品することだけが良いことなのかわからなくなってきたところもあります。何か“狭める”ような気もしていて。

だからこれからの若い人にとっては、自分の個展を“本場所土俵入り”みたいな気持ちで勝負して、そこで自分のポジションをつくっていくというのが一番良いのかもしれないね。

秋元:昔のように、パトロンや問屋さんが向こうから買い付けに来てくれるわけじゃないですからね。その中で公募展は有効だけれど、セルフプロデュースというか、“自ら発表すること”がより大切だと。

武腰:ええ、地球も狭くなりましたから、世界に買ってくれる人を探すつもりでいたほうがいい。

秋元:武腰さんはお弟子さんも多くいらっしゃると思いますが、やっぱり後進を育てようという想いで？

武腰:というか、展覧会で出会った子が多いですね。

僕はもっと若い人が気軽に遊びに来てくれたらなあと思っていますよ。そういう人が来てくれると、こちらも育ててあげたいという想いになる。

でも、「武腰のところ行ったら絵描かされるから」って嫌がられているのかなあ(笑)。
しかし寺井というところでは陶芸家は“絵描き”と呼ばれていたから。
立派な陶芸家はみんな絵も描けると思うんですが。



武腰:時代も変わって、九谷焼を取り巻く状況も刻々と変化していますからね。例えば、今美大に行っても研修所に行っても、有鉛の絵の具は有害だということで、使わせてもらえません。しかし有鉛の絵の具でない、出ない九谷焼特有の“強さ・厚み”というものもある。まあでも、こういう状況の中で、江戸とは決別するような、また新しいアートというのが生まれてくるのでしょうか。

これから僕は“令和の古九谷”というものをつくっていかなければならないと思っています。できることなら自分の勉強に、ヨーロッパの方にも行ってみたい。古九谷を観ているとセザンヌの構図を思うことがあるんですよ。

千年も経てば、江戸も令和もさして関係ないですから、僕の作品を古九谷だと思ってくれないかなと考えながら、日々制作しています。



KUTANism

主催：KUTANism実行委員会 共催：能美市、小松市 協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷焼団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタンイズム実行委員会事務局

〒923-1198 石川県能美市寺井町た35 (能美市役所 産業交流部 観光交流課内) MAIL: info@kutanism.com



クタンイズム 

<https://kutanism.com>